

『エデンの園』における「楽園」

森 裕 子

The Paradise in *The Garden of Eden*

Hiroko MORI

序 文

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899—1961) の遺作である『エデンの園』(*The Garden of Eden*, 1986) は、1986年に当時匿名であった編集者トム・ジェンクス (Tom Jenks) によって編集され、スクリブナーズ社 (Charles Scribner's Sons) から出版された。この物語は主に1920年代半ばの南フランスが舞台となっている。そこに滞在している新婚旅行中の作家デヴィッド・ボーン (David Bourne) とその妻キャサリン (Catherine) のボーン夫妻にマリータ (Marita) という女性が加わって生まれた奇妙な関係を中心に描かれている。

デヴィッドとキャサリンは、最初の訪問先の南フランスの小さな町ル・グロ・デュ・ロワ (le Grau du Roi) のホテルで、二人だけの幸せな「楽園」生活を送っていたが、彼らの夫婦関係は次第に狂い始める。滞在場所をル・グロ・デュ・ロワからスペインのマドリッド (Madrid) へ移し、その後、フランスのラ・ナプール (la Napoule) へと変えるが、二人は関係を修復することができないまま、結婚生活は崩壊寸前となる。

デヴィッドとキャサリンの関係が危険な状態にあった時、彼らの前に現れたのがマリータだった。彼女の存在が、デヴィッドとキャサリンの「楽園」を崩壊させる原因ともなっているが、最大の原因はデヴィッドとキャサリンがそれぞれの世界に自分の存在意義を見出し、そして、二人が別の「楽園」構築を目指したことにあった。この論文では、『エデンの園』において、ヘミングウェイが描いた「楽園」とは何であったのかということ、デヴィッドとキャサリンが追い求めた「楽園」を通して考察していきたい。

平成16年2月28日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

1 楽園生活

ル・グロ・デュ・ロワのホテルで幸せな新婚生活を送るデヴィッドは、キャサリンとの「楽園」を次のように考えている。

He had many problems when he married but he had thought of none of them here nor of writing nor of anything but being with this girl whom he loved and was married to and he did not have the sudden deadly clarity that had always come after intercourse. That was gone. Now when they had made love they would eat and drink and make love again. (13-14)¹⁾

デヴィッドにとって「楽園」とは、‘the sudden deadly clarity’を感じない世界、つまり、キャサリンによる十分な経済援助の中で、自分の作家としての将来に対する不安や作品への評価を考えず、ただ泳ぎ、食べ、酒を飲み、眠り、愛し合うだけの毎日、現実を忘れることができる世界だった。

デヴィッドにとってこの「楽園」生活は、作家としての将来を生きるための休息期間でもあった。その上、彼の仕事の全面的な経済援助を提供する女であるキャサリンが妻として支えてくれている二人の世界に、デヴィッドは満足していた。しかし、キャサリンは不満を抱き始めていた。デヴィッドには新婚旅行の後、作家として生きるべき世界があり、希望に満ちた未来があるが、キャサリンには作家の妻以外の生きるべき世界が見えなかった。デヴィッドが彼自身の生きるべき世界を見つけた時、キャサリンは二人の世界に取り残されるという不安を抱く。

キャサリンはデヴィッドと自分たちの現状について話す時、“But I get so hungry,” (5)と彼に訴える。いくら食べても空腹を覚えるキャサリンは、二人の世界に対して満たされない、精神的な空虚感を抱くようになっていた。理由の分からない空腹感に不安を覚えるキャサリンは、“Do I bore you, darling?” (11)とデヴィッドに問いかける。自分との結婚生活に満足しているかのようにみえるデヴィッドであるが、彼も実際は退屈しているのではないかと尋ねるキャサリンの言葉には、二人の世界に対する彼女自身の退屈の意味が込められている。二人の「楽園」に満足しているデヴィッドと、どこか物足りなさを感じているキャサリン。ただ夫を支え、安らぎを与えるだけの妻としての二人の「楽園」にキャサリンは退屈し

1) Ernest Hemingway, *The Garden of Eden* (1986. New York: Scribner Paperback Fiction, 1987) 以後、本文中の引用は、() 内に本テキストの頁数のみ表記する。

始めていた。

2 楽園喪失

デヴィッドが求めているものは、彼の世界に妻として属する女のキャサリンなのか、あるいは、一人の人間としてのキャサリンなのかと疑問を抱き始め、キャサリンは次第に自我に目覚めていく。デヴィッドの妻であるだけの自分の存在に満足できず、キャサリンは夫を支える妻としての役割だけでなく、作家として自己を確立し始めるデヴィッドと対等の立場になることを望むようになる。デヴィッドの妻として彼に属した存在ではなく、自己の確立された、今までとは別の自分になりたいというキャサリンの願望は、男になる、デヴィッドになるという方法で実行される。

ル・グロ・デュ・ロワの村で、キャサリンは誰よりも一際目立つ個性的な存在だった。彼女のようにショートパンツ姿で自転車に乗り、真っ黒に日焼けした女性は誰もいなかった。キャサリンには女らしく慎ましく振る舞うことは、自分の行動を制限されることであった。彼女にとって女であることは、本当の自分を捨てることであり、退屈過ぎる世界に生きることだった。デヴィッドの女、作家の妻として彼に付属した世界で生きていたキャサリンは、妻という役割だけではなく、作家であるデヴィッドのパートナーとして、彼と対等の存在になろうとした。ロバート・E・フレミング (Robert E. Fleming) はそのような彼女について次のように述べている。

Catherine has difficulties with her own ambivalence about being wife and partner to a writer.²⁾

当時はまだ、女性が男性と対等な立場になることは困難なことであり、キャサリンには、デヴィッドの妻と彼のパートナーの両方を満たすことはできなかった。そこで、キャサリンは自己表現のために、女らしく振る舞うことを捨て、男のような外観と男のような行動をとるようになる。そして、最も身近な男性であるデヴィッドになろうとした。

デヴィッドと同じ髪型になり、彼女は彼に宣言する。

“I’m a girl. But now I’m a boy too and I can do anything and anything and anything.”

2) Robert E. Fleming, *The Face in the Mirror: Hemingway's writers* (Alabama: The University of Alabama Press, 1996)

(15)

「何でもできる」というのは、世間の抑圧から解放され、本当の自分になれるというキャサリンの実感である。つまり、彼女にとって女であることは、「何もできない」ということだった。男になることで、今までの自分とは別の自分になり、抑えられていた自分という自己を自由に表現することができるかとキャサリンは信じた。男になることから、「何でもできる」と感じたキャサリンの最初の試みは、デヴィッドを自分の女にすること、つまり、性の逆転という新しい関係を二人の間に作ることだった。

“You are changing.” she said. “Oh you are. You are. Yes you are and you’re my girl Catherine. Will you change and be my girl and let me take you?”

“You’re Catherine.”

“No. I’m Peter. …” (17)

この会話から、キャサリンはデヴィッドを自分自身にするという性の逆転の関係を彼に求めただけでなく、彼女自身はデヴィッドではなく、ピーターという新たな人格になろうとしていた。つまり、二人の世界から作家としての自分の世界を確立し始めるデヴィッドを消去することによって、ピーターとなったキャサリンは、キャサリンとなったデヴィッドを、彼女が創る新しい世界に彼女の付属物として住ませようとしていた。しかし、デヴィッドは現実社会に作家としての自己の世界を創り始め、キャサリンの女になることも、彼女が創る世界に彼女の支援の中で生きることも拒否する。

キャサリンとデヴィッドのもとへ出版社から彼の処女作に対する切り抜きと広告の校正刷りが送られてきた。評価はどれも高かったがキャサリンは素直に喜ばず、彼に話す。

“I’m frightened by them and all the things they say. How can we be us and have the things we have and do what we do and you be this that’s in the clipping?” (24)

切り抜きにより、デヴィッドが二人の世界を飛び出し、作家としての地位を社会に築き始めていることをキャサリンは知る。しかし、自分は新しい世界を築くこともできず、二人の世界に一人取り残されていることを悟ったキャサリンは、冷静ではいられなくなる。そこで、彼女は二人の「楽園」にはなかった性の逆転という関係によって創られる新しい世界にデヴィッドをとどめようとした。けれども、キャサリンはこのような自分の行為を「悪魔」“the

devil things” (29) と呼んでいる。この言葉から、自分の中にある、デヴィッドの作家としての自己表現の世界を妨害しようとする意識に対し、苦悩しているキャサリンの姿を読み取ることができる。自我に目覚め、デヴィッドを自分の付属物として二人の世界に住ませたいという願望が強まるほど、キャサリンは彼にとって「悪魔」となる。ナンシー・R・カムリー (Nancy R. Comley) とロバート・スコールズ (Robert Scholes) は次のように述べている。

Catherine Bourne is given the name of devil in *The Garden of Eden*, a garden in which she plays the roles of both Eve and Satan.³⁾

キャサリンは妻として、女としてデヴィッドに安らぎを与え、「楽園」を守るイヴの役割と、彼を自分の創造する世界に誘惑する「悪魔」の役割をする。しかし、彼女はデヴィッドを二人の世界にとどめることができず、「悪魔」としての誘惑は失敗に終わる。

デヴィッドを自分の世界に住ませるためには女として生きなければならない。そして、自分の世界を創造するためには男として生きなければならない。妻として、退屈な女の世界に自我を閉じ込めて生きることができないキャサリンは、“I’m how you want but I’m how I want too.” (29) とデヴィッドに訴える。デヴィッドの望む妻であろうとする心と、自分であろうとする心の葛藤から、次第にキャサリンは精神不安定になる。そして、スペインへ移った彼らは、さらに自己の世界を確立し始める。

二作目の小説を書き始めたデヴィッドに対抗するように、キャサリンは髪を短くし、さらに男として街を歩くようになる。キャサリンは、作家として現実社会に飛び出そうとするデヴィッドを、彼女が築こうとしている世界に引き留めたいが、その方法が分からなく、デヴィッドに話す。

“Now it’s just like being hungry all the time and there’s nothing you can ever do about it.” (53)

精神的な空腹感を満たすことができず、デヴィッドの望む「楽園」と自分が求める「楽園」の相違によるキャサリンの葛藤が表れている。

3) Nancy R. Comley and Robert Scholes, *Hemingway’s Genders: Rereading the Hemingway Text* (New Haven: Yale University Press, 1994) p. 52.

“When you start to live outside yourself,” Catherine said, “it’s all dangerous. Maybe I’d better go back into our world, your and my world that I made up; we made up I mean. I was a great success in that world.” (54)

本能のまま「楽園」生活を送っていた二人であったが、デヴィッドは作家としての新しい自分の世界へ飛び出そうとし、キャサリンは自分の経済力で二人の「楽園」が築かれていたことを主張するようになる。自分が二人の世界に戻ることで、再び平穏な結婚生活を送ることができるかとキャサリンは知っていた。しかし、彼女は男になり、新たな二人の世界を築こうとする。自己の存在意義をそれぞれ別の世界に見出そうとしたことで、彼らの夫婦関係は崩壊し始め、同時に、「楽園」を喪失する。

3 楽園構築

二人の「楽園」を喪失し、作家としての世界を着実に構築し始めたデヴィッドは、自分を支え、寄り添って生きていた以前のキャサリンを愛していると彼女に話すが、キャサリンは、“I’m glad someone likes it because it’s a god dammed bore.” (70) と皮肉を彼に言う。そして、キャサリンは女として、妻としての退屈な自分の精神状態を、“Do you want me to wrench myself around and tear myself in two...?” (70) とデヴィッドに伝える。女としてデヴィッドとの「楽園」に戻りたいという心と、自己の世界を構築するために男であろうとする心に引き裂かれるキャサリンの苦闘が表れている。キャサリンとデヴィッドはラ・ナポールへ場所を移し、新婚旅行の出来事を小説にすると決め、その頃、カンヌ (Cannes) のカフェでマリータと出会う。二人の旅行記を作品にすることは、「楽園」を取り戻したいキャサリンと、彼女に歩み寄ろうとするデヴィッドの最後の試みでもあった。

マリータとキャサリンはお互いに興味を抱き、親しくなるが、デヴィッドはマリータの存在を、“...you’re very decorative.” (98) というように、最初は単なる飾りとしか考えていなかった。キャサリンもマリータについて、デヴィッドに次のように話している。

“I thought you’d like to have someone pleasant and attractive for me to have as a friend to go around with while you’re working.” (100)

キャサリンにとってマリータとは、デヴィッドが小説を執筆中の、自分の思い通りにできる遊び相手に過ぎなかった。デヴィッドを愛しているが、女として彼に付属して生きること

ができないキャサリンは、彼と二人の世界の構築ではなく、マリータを引き込んだ三人の間に世界を構築することで、新たな「楽園」の創造者になろうとした。デブラ A・モデルモグ (Debra A. Modellmog) は述べている。

キャサリンはマリータとデイヴィッド双方の暮らしに、自分の存在意義を復活させて地歩を奪回しようと試みる⁴⁾。

自分の存在意義を新しい世界に見出そうとしたキャサリンだったが、彼女の鏡のような存在になっていったマリータは、キャサリンと同じ髪型にし、同じくらい黒く日焼けし、同じようにデイヴィッドを愛し始めた。そして、マリータは、“... I am yours and I'm going to be Catherine's too.” (105)とデイヴィッドとキャサリンに宣言した。デイヴィッドの女でもあるが、キャサリンの女にもなるということは、デイヴィッドを愛し、キャサリンとも関係を持つことによって、マリータは三人の世界に自分の存在意義を示そうとした。単なる飾りではなく、意志を持った一人の女性として、マリータが三人の世界に存在していることを知ったキャサリンは動揺を隠せず、デイヴィッドに次のように話す。

“I never should have let you in for any of it. Not for any part of it.” (105)

デイヴィッドの愛をマリータに奪われることは、キャサリンが創ろうとしている三人の「楽園」を完全に失うことだった。そこで、キャサリンは自分が仕掛けた三人の「楽園」について、“We've shared all the guilt.” (111) と言うことで、夫婦としての関係を崩壊させた罪を三人で共有し、何とか「楽園」にとどまろうとしていた。

デイヴィッドの愛を失うと悟ったキャサリンは、「楽園」に残るためにはマリータの女になるしかないと考える。

“... she said it was better if I was her girl and I said I didn't care either way and really I was glad because I am a girl now anyway and I didn't know what to do. ...” (113)

この時、キャサリンは男ではなく女になっていた。そのため、マリータと関係を持ったこ

4) 島村法夫／小笠原亜衣 (訳) 『欲望を読む—作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウェイ』 デブラ・モデルモグ (著) (東京：松柏社, 2003) p. 145.

とに後悔するキャサリンだったが、デヴィッドも彼女について、‘He was shocked at the dead way she looked and at her toneless voice.’ (117) と感じている。もはや「楽園」を築こうとする生気も失われ、別人のようになったキャサリンに、デヴィッドは衝撃を受ける。マリータの女になることで、キャサリンは自分がデヴィッドを愛していることを再確認するが、自己の確立のために男として自分がデヴィッドとの世界を飛び出した時、「楽園」は失われていたと認識する。

“I did something I know. But it’s gone now.” (118)

今は失ってしまった二人の「楽園」の証しとして、キャサリンは最後の手段である旅行記の完成をデヴィッドに託すが、フレミングが ‘When Catherine and Marita begin their love affair, David lives more exclusively within the story he is writing, ...’ と述べるように、キャサリンの異常ともとれる行動から、彼はキャサリンとの「楽園」ではなく、少年時代の父との狩りの物語の完成に情熱を注ぐ。作家として生き始めるデヴィッドと、彼を支えるマリータにより、三人の世界からも追われることとなったキャサリンについて、ロバート・ハーシュフィールド (Robert Hirshfield) は述べている。

... while Catherine is gone on her publicity campaign for David’s stories, the ones which she happens to like, David is reborn under Marita’s care. She spurs him on to begin his Africa works anew. It is implied that he will leave Catherine and marry Marita, a woman who clearly understands him better than Catherine, a woman who wants his happiness as well as hers.⁵⁾

デヴィッドはキャサリンとの旅行記ではなく、アフリカで狩猟をした少年時代の父との思い出や、その時に父が殺した象に関する短編を完成させた。それらの作品をマリータに読ませたことで、デヴィッドが作家としての新しい世界を確立し、そこには自分ではなくマリータがいることをキャサリンは確信した。

デヴィッドがキャサリンとの物語を放棄することは、彼女との決別を意味する。ローズ・マリー・バーウェル (Rose Marie Burwell) は述べる。

5) Robert Hirshfield, “Motifs in *Island in the Stream* and *The Garden of Eden*” 『アメリカ文学』第56号 (日本アメリカ文学会東京支部, 1995) p. 37.

The cessation of the honeymoon narrative and the symbolic death of Catherine, which in the manuscript David consciously links with the death of the elephant, is irrevocably decided at this moment ...⁶⁾

デヴィッドにとって象の死は、デヴィッドが愛したキャサリンとの決別であった。彼は少年の時、月夜に見た立派な象が、父に殺され変わり果てた様子について描写する。

Now all the dignity and majesty and all the beauty was gone from the elephant and he was a huge wrinkled pile. (199–200)

自己の世界を創造することもできず、デヴィッドも失い、精神分裂に陥ったキャサリンには、以前の気高さも、威厳も、美しさも見られなかった。マリータに支えられて完成した短編は、キャサリンのいない世界で、作家として生きるデヴィッドのマリータとの新たな「楽園」構築を意味する。一方、デヴィッドとの「楽園」の再構築も、新しい「楽園」の構築もできず、再び一人取り残されたキャサリンは、自己の葛藤から次第に神経衰弱になっていく。

完成したデヴィッドの原稿を無理やり取って読んだキャサリンは、自分の存在しない世界を読むことができずに破り捨て、二人の旅行記を書かないと彼女に告げたデヴィッドを責める。

“That’s dirty,” Catherine said. “That was my present and our project.” (188)

デヴィッドと二人の「楽園」の証しであり、彼との世界を共有できる唯一の方法であった旅行記の完成を放棄され、狂気に陥ったキャサリンは、旅行記以外の全ての原稿と切り抜き等を燃やし、彼のもとを去る。自分であるため、自己の世界を確立するため、デヴィッドが求める女になることを放棄したキャサリンの「楽園」構築は失敗に終わった。

結 論

デヴィッドの妻である自分の存在に満足していれば、キャサリンは「楽園」を追われることはなかった。しかし、彼女は二人の「楽園」に空腹感を覚え、自我に目覚め、自己の確立

6) Rose Marie Burwell, *Hemingway: The Postwar Years and the Posthumous Novels* (New York: Cambridge University Press, 1996) p. 120.

のための特別な「楽園」の構築を試みた。ヘミングウェイが描いた多くの女性の中で、『エデンの園』のキャサリンはパーウエルも述べているように (110)、最も複雑な性格を持つ。男を愛し、支えるだけの生き方に退屈し始めたキャサリンは、自己表現のために男となり、自分が中心となって創造する世界にデヴィッドを閉じ込めようとした。しかし、彼女の世界にとどまることを拒み、彼は作家としての世界を築き始めていく。自分の世界につなぎ止めるため、デヴィッドの世界を妨害しようとした時、彼にとってキャサリンは「悪魔」となる。

この作品では当時の女性が、一人の人間として生きようとする、自分であろうとすることは非常に困難であったことが、キャサリンの異常な行為を通して描かれている。パーウエルは次のように述べている。

her growth, when she is viewed apart from the burdens she bears as a facet of Hemingway's psyche and a stand-in for the women he feared and/or desired, is a striking analogue of the history of women's creative struggle.

デヴィッドが与える女としての幸福と平穏な生活を捨て、男になること、デヴィッドになることで、自分自身の世界を築こうとしたキャサリンの苦悩する姿には、自己の確立を目指す女性の困難を読み取ることができる。フレミングは、'Hemingway's analysis of the reactions of the writer's wife is perceptive and sympathetic.' と述べている。自我に目覚め、自己の確立のための方法を知らなかったキャサリンは、男になること、最も身近なデヴィッドになることでしか自己表現できなかった。そこにはデヴィッドの「楽園」構築、すなわち、男性が自分の世界を持つことより、キャサリンの「楽園」構築、すなわち、女性の自己実現の困難な時代に対するヘミングウェイの同情がみられる。

作家としてのデヴィッドと対等の立場となり、自分の世界を創造することによって自己の確立を試みようとしたキャサリンが、彼の妻として生きる「楽園」と彼女が築く「楽園」を通して最後に得たものは、自分であることを貫くことの厳しさだった。デヴィッドが自己を確立し、作家としてマリータとの「楽園」を手に入れ、創造者として成功していく姿に対し、自分の自我を「悪魔」としか考えられないキャサリンの「楽園」の喪失と、構築の失敗によって、ヘミングウェイは、人は常に「楽園」を追い求めるものであり、特に当時の女性が「楽園」を自ら手に入れることの困難さを示している。

参考資料

- Burwell, Rose Marie. *Hemingway: The Postwar Years and the Posthumous Novels* (New York: Cambridge University Press, 1996)
- Comley, Nancy R. Comley and Scholes, Robert. *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text* (New Haven: Yale University Press, 1994)
- Fleming, Robert E. *The Face in the Mirror: Hemingway's writers* (Alabama: The University of Alabama Press, 1996)
- Hirshfield, Robert “Motifs in *Island in the Stream* and *The Garden of Eden*” 『アメリカ文学』 第56号 (日本アメリカ文学会東京支部, 1995)
- 島村法夫／小笠原亜衣 (訳) 『欲望を読む—作者性, セクシュアリティ, そしてヘミングウェイ』 デブラ・モデルモグ (著) (東京: 松柏社, 2003)
- 西尾 巖 (著) 『ヘミングウェイと同時代作家—作品論を中心に』 (東京: 鳳書房, 1999)
- 日本ヘミングウェイ協会 (編) 『ヘミングウェイを横断する—テキストの変貌』 (東京: 本の友社, 2002)

'The Paradise' in *The Garden of Eden*

Hiroko Mori

The Garden of Eden, Ernest Hemingway's posthumous work, was edited by Tom Jenksa, anonymous editor, and published from Charles Scribner's Sons, in 1986. Background of this story is South France in about the middle of 1920's. And the strange relation of David Bourne, Catherine Bourne and Marita is described in this.

David and Catherine were having happy 'the paradise' life in hotel at le Grau du Roi at first, but their married life begin to break soon. When David and Catherine visited la Napoule, they met Marita. A Cause of collapse of David and Catherine's 'the paradise' is Marita. The greatest cause, however, is that they aim to construct each 'the paradise'. I want to consider about 'the paradise' in *The Garden of Eden*.

David was satisfied 'the paradise' life with Catherine in hotel at le Grau du Roi. Because he had thought of none of writing here nor of anything but being with Catherine whom he loved and was married to and he did not have the sudden deadly clarity that had always come after intercourse. They would only eat and drink and make love again. Catherine, however, was bored 'the paradise' as mere David's wife. David began to establish self-world as writer, so Catherine would be herself, and her wish was realized by a way of being a boy.

When Catherine became a boy, she thought to do anything. Then she tried make David her girl, and would create new 'the paradise'. That was reversal of sex. But David rejected being her girl, and he was establishing his world as writer still more. When Catherine tried to shut David into her world, she call the devil things about self-action.

Catherine understood that she should be a girl to shut David into her world, and be a boy to create self-world. But Catherine couldn't be David's wife. When David and Catherine tried find out each the sel-significance for being, their married life began to break, and they lost their 'the paradise' at the same time.

When they lost their 'the paradise', David began to construct self-world as writer, but Catherine struggled with her mind that would be a girl and a boy. At that time they met Marita. Catherine tried create new 'the paradise' among David, Catherine and Marita.

Marita, however, tried to be David's and Catherine's too, and she would show the self-significance for being. Catherine realized that David's heart was fascinated by Marita, and Catherine lost her 'the paradise'.

David succeeded in his world as writer, and got his new 'the paradise' with Marita. But Catherine couldn't get her 'the paradise', and failed in self-realization. Hemingway showed difficulties that women would get self-realization at that time in this story.